

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.28)

「それぞれの土地にその土地の風習」

・・・クリスマスの過ごし方・・・

メキシコでは12月になると、1年の中でも大切な行事で、もっとも楽しく祝うお祭り日であるクリスマス一色になる。あるときは仏教徒、時には無宗教、しかしこの日ばかりは、キリスト教という人も多い日本と異なって、世界でも有数のカトリック信者の多い国だから、当然といえば、当然なのであろう。

街路にはイルミネーションはもちろんの事、大きなクリスマスツリーが飾られ、デパートや商店、市場にはクリスマス関連商品がずらりとならぶ。

さらにクリスマスの花、メキシコ原産の「ノーチェ・ブエナ(聖夜)」(日本では、ポインセチアと呼ばれている)の赤い花が、場所によっては、他の草木を撤去して、一斉に植え替えられ街中にあふれる。

各家庭でも、クリスマスツリー、「ナシミアント」(キリストが生まれた所を再現した物)などが、家の中はもちろん、屋根、入口、庭にも飾り付けがなされ、近所の街を歩くだけで、いろんな飾り付けを見られて実に楽しい。

クリスマスの行事は、その9日前くらいから、「ポサーダ」という前夜祭から続いている。ポサーダとはスペイン語で宿屋という意味である。

マリア様がキリストを宿した時、王様の追手(神の子が生まれる事を恐れた王様は、小さい子供を皆殺しにするよう命令を下した)から、その難を逃れるために、妊娠していたマリア

アと夫のヨセフが、放浪の旅に出て宿を乞い、そして、ベツレヘムにやって来て、そこでイエスを馬小屋で生むという故事からきているようだ。

そのため、ポサーダの祭りは、必ず行う儀式がある。以下は実際に見聞きしたわけではないので、インターネットからの情報で、「講釈師見てきたような嘘を言い」的な内容を記すと、

ポサーダのパーティに集まった人達が、行列して道を練り歩き、先頭の二人がマリアとヨセフ、ロバの人形を

持ち、後の人達は手にロウソクを持って道を歩く。そして、ポサーダをする家にやってきて、家の戸を叩き、家の中の人と次の問答歌が行われる。

「一夜の宿を貸してください」、「いえいえ、どろぼうかもしれないから、戸は開けられません」

「どうぞ、一夜の宿を貸して下さい」、「ここは宿屋ではありません。宿は貸せません」

「どうぞ、一夜の宿を貸してください」、「いえいえ、見知らない人に宿は貸せません」

「私の妻が神の子を宿しています。どうぞ、宿を貸してください」



レフォルマ通りに完成した、ギネス更新を狙う、頂上の星まで、112メートルの高さのクリスマスツリー(夜は点灯される)



「それは、それは、どうぞ、お入りください」 そんな後で、ポサーダのパーティが始まる。

私もワIFEの刺繍教室仲間のメキシコ人の家での、クリスマスイブの日、夜の10時頃から始まり、次の日の明け方まで続いたパーティに招待され、ポンチェという暖かいミックスフルーツジュース(大人は、これにラム酒を入れる)を飲んだり、バカラオ(塩タラ)料理、七面鳥料理などのご馳走をいただいていた。

上記の演技は見られなかったものの、その家では、添付写真のようにイエスキリスト像と、その家の子どもに見立てた像を大きな風呂敷にならべ、参加者が風呂敷敷をゆすりながら皆で子供の安息を祈る事も行なわれた。

まさに、今回のタイトルに一部採用した次の諺が似つかわしい。

「**En cada tierra su uso, y en cada casa su costumbre**」(エン カダ ティエララー スウ ウソ イ エン カダ カサ スウ コストウンブレ

と発音し、直訳はそれぞれの土地にその土地の風習、それぞれの家にその家の習慣と言う意味で、日本の諺では、所変われば品変わるに相当するだろうか)

ポサーダというと、子供達の大好きなピニャータがある。ピニャータはパイナップルの形をした紙の張



りぼてに、5~9個の円すい形の「光」が放たれる星型デザインに、極彩色の紙を貼り付けたものだ。

本体の部分は直径1メートルくらいの大きなものから、手の拳大の小型のものまでさまざまな大きさがあり、中型サイズで1個200ペソ(約2000円)ぐらいである。

市場やスーパーマーケット、民家の軒先など、街のあちこちに吊り下げられたピニャータは、現在では子供が喜ぶような、動物やテレビのアニメキャラクターなど、形は様々なものが作られて、誕生日などの祝い事にも登場する。

このピニャータの中に、お菓子やフルーツなどを入れ、紐でつるし、ゆらゆら動かす。子供達が目隠しをして、参加者に、ピニャータの歌ではやされながら、棒でたたいて割れたピニャータから出てくる菓子などを、皆で競って拾い楽しむ。

時には、小さい子供のお母さんなどは、見るに見かねて自らお菓子拾いに参加してしまうのもおり、子どもを思う心は洋の東西を問わないようだ。

ピニャータは悪の象徴で、目隠しをする事で盲目的に、ただひたすら信心することによって悪を叩く。すると、贈物に象徴される、神からの報いを受ける事ができるということである。

そんなメキシコの伝統行事も、最近陰りが見え始めているという人もいた。隣国のアメリカから、クリスマスツリーやサンタクロースだけで祝う様式が「侵入」してき



たためだとのことだ。領土を侵略戦争で奪われたり、経済的に依存していて、昔から「米国に近く、天国に遠い」と評されるメキシコの悲劇が、ピニャータにも及んでいるということだろうか。

以上は表の部分を書いてきたが、こうして、クリスマスやピニャータを祝う多くの人がいる反面、それに比例するかのように、子豚の貯金箱のようなものを持って、金をねだりに来る身なりの貧しい子供たちが溢れるのもこの頃で、私達夫婦は少しでも彼らがクリスマスを楽しく過ごせるように、彼らと出会うと何がしかの金をその箱に投じた。

彼らの行動も、子どもをダシに使った大人の一種の不労行為なので、金をやるべきでないという人もいるが、ボラッチョ・ボニート氏としては、現実を素直に信じたい。このような境遇の子どもを見ると、何ともやりきれない気持ちと、一方では何かしてやりたいという複雑な気持ちと、心の底に湧き上がってくるのであった。

タイトルに述べるまでもなく、場所が変わると言語、風俗、習慣とあらゆるものが変わってしまう。情報が満ち溢れ、世の中を良く知っているつもりでも、当然のことながら、逆に知らないことの方が多いことに気がついてくる。

その意味で外国を旅することは、己を知る旅でもあるのだとも思う。

(2009年12月26日、徹夜近いパーティの疲れがまだ続いています。年をとると回復もままならないものです)